

つがるの昔っこ (昔話) ⑨

マタギの十兵衛 (津軽弁)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ



昔、目屋の村さ、何（な）も彼（か）も鉄砲
撃（うち）名人のマタギ居でたんだど。狙った
獲物、一匹も逃（のが）した事無ねえすだけ
の腕のいい男で『十兵衛』てす名前であつたば
て、この十兵衛、又、空気随（からきじ）でか
らきじで、人、こんだてば、ほんでね。ほんで
ねてば、ほんだ、て云（す）、へそ曲がりでも
あつたど。



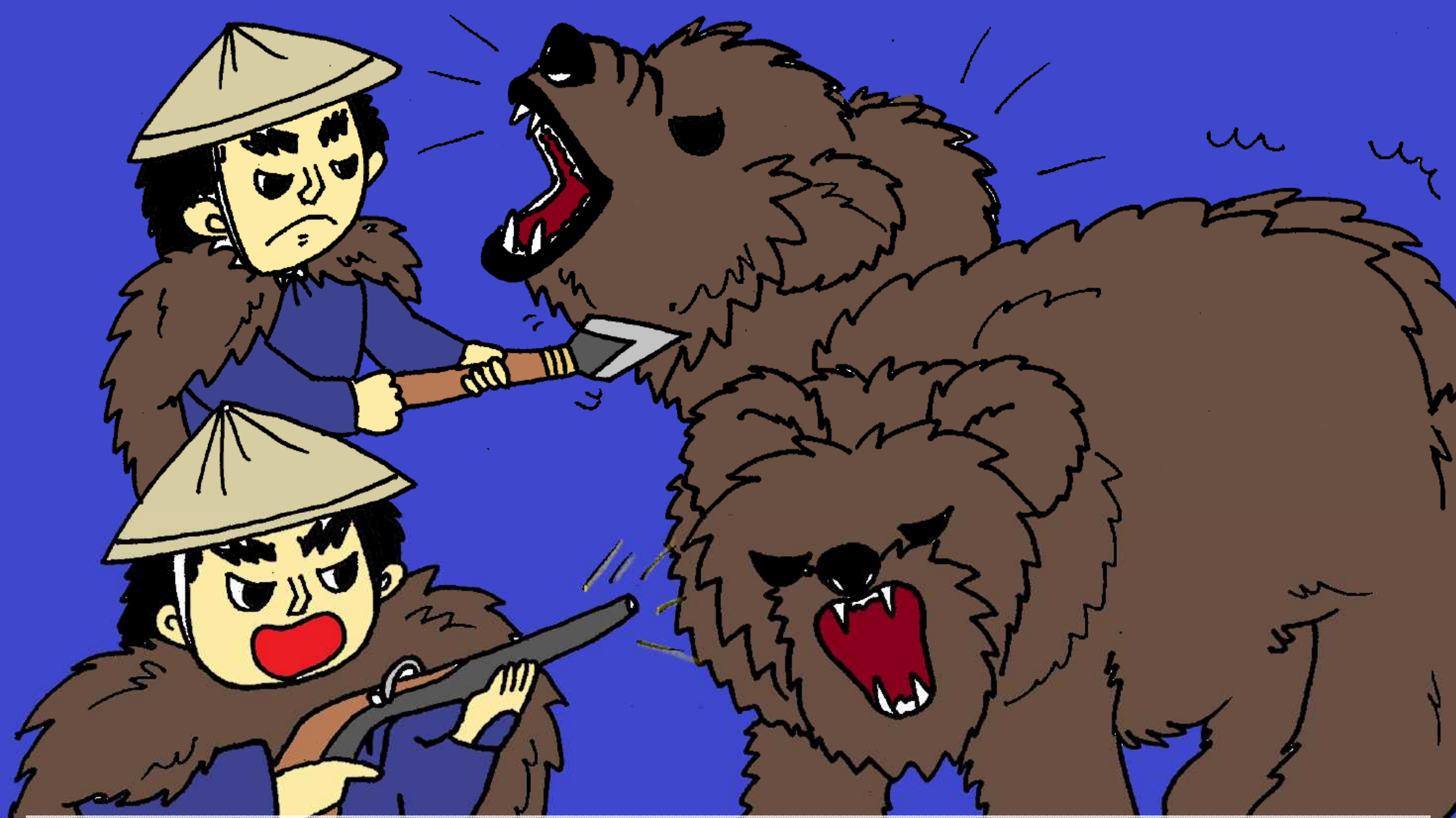
ある時、村のマタギ共（ど）六人して、目屋の奥さ獣（けもの）獲りに行くことになった。雪コ、なんぼが敷がさった冬の日であたど。じょうとぐの沢越えで、たがひぐちの瀧越えで、土止（どど）めの所（どご）まで行たきや、ウアー、ウアーて、声聞こえできた。『何だばありや』みんな、声す方さ走て行てみだど。そしたきや、土止めの瀧の後ろの方さ、大（で）っただ洞穴あつて、その中がら聞こえでくる。

こそらっ行って見だっきゃ。今まで見た事も
無(ね)んた、大(で)っただ熊、ゴロン、ゴロ
ンゴロンど転がって歩きながら、唸り声をあげて
あたど。年いったマタギ

『熊、今、眠で居ねばまいね時期なのに、ありゃ
余程、業だ病さととり憑かれた熊だ』って云(し)
たど。



『昔から『病持ちの獣、殺すな』ず、マタギの
掟ある。ささ、行くべし、行くべし。』



したきゃ、十兵衛『なななな、何ず話だば、こした大き宝物、捨（な）げで行くてな。どこに、した話あるば』皆の反対押し切って、鉄砲向けだど。

ズダーンと撃ったきゃ、熊、ビーンと起き上がって、入り口めがげでダダダダダと来た。『ウワー』あどのマタギ共（ど）、逃げだど。十兵衛、背中さ背負てら山刀抜いてドーツと熊突いた。

熊、斃（たお）れた。十兵衛、胸裂いで、早速、熊の肉取ることにしたど。

『馬鹿ケン共（ど）、ろお、こっした、いい熊の、こっしたいい肉、取ね良（い）んず。まままま、おらほの村のマタギだば、すぐなし、やすなし、ほんつけなしの三無（さんむ）した』
づぐなし、やすなし、ほんつけなしで、津軽で、そんき持っている人と三無してすんだど。

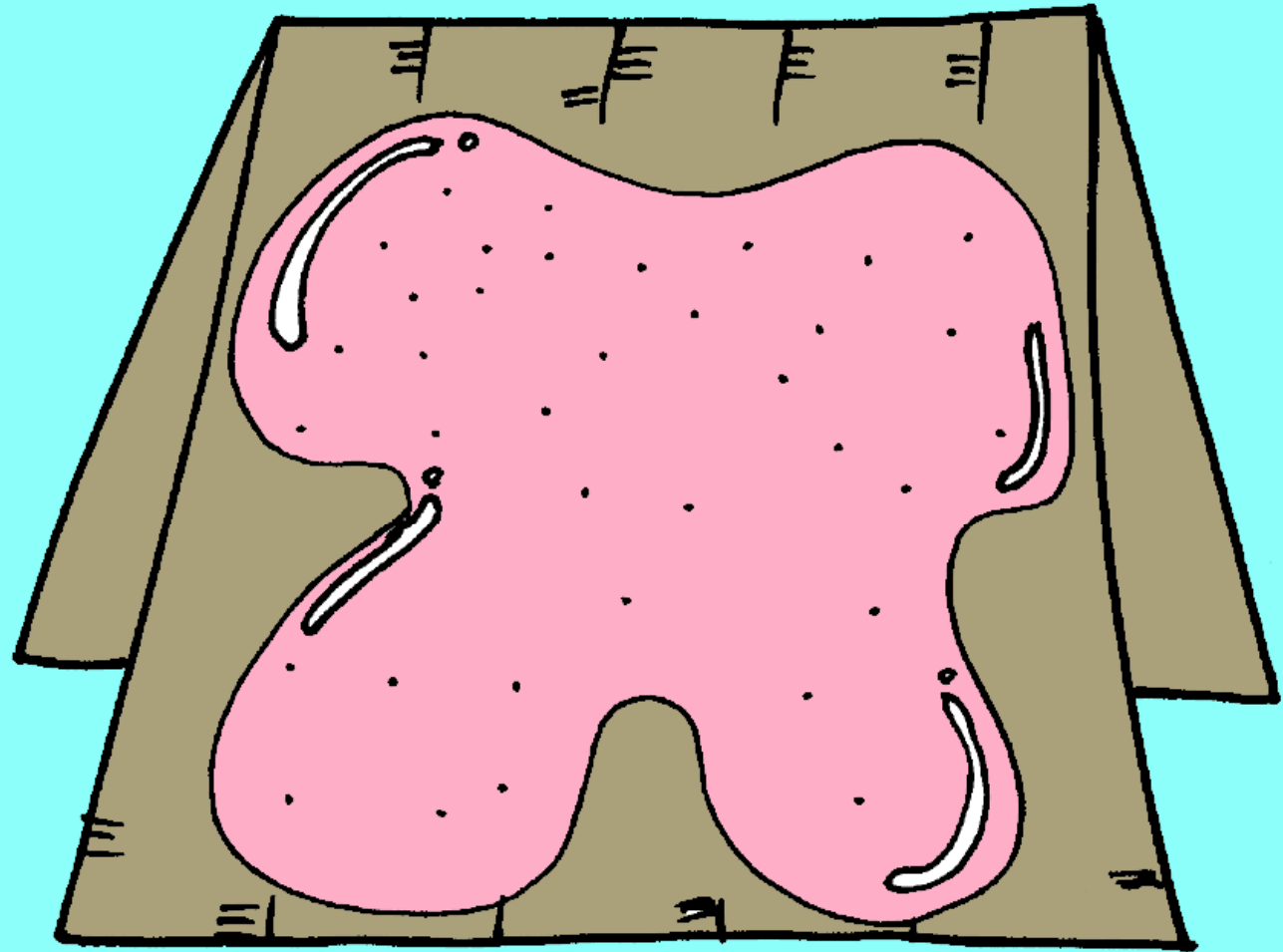
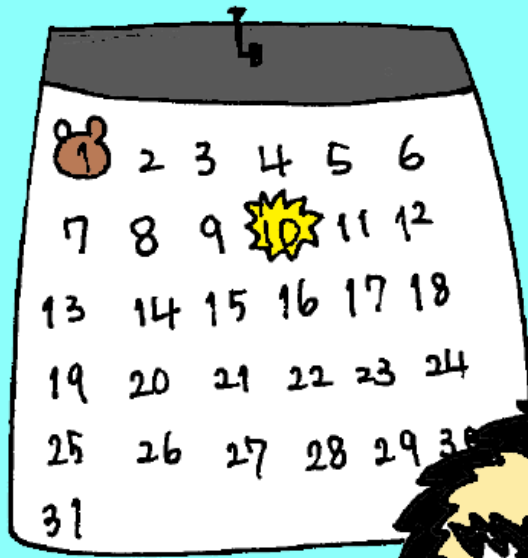


腹割いて、肉取ってみだきや、臭して、臭して、臭して、何（なん）も食（か）えねしてあた。。
『くそお、やっぱりこりや、業だ病の熊だ。仕方無（ね）、へば、肝取る』山刀でウーツとえぐつて、両手で持ち上げだきや、指の間（あいだ）がら、ダラダラ、ダラダラど零（こぼ）えだ。
『ウワー、肝も持ちくらえねんだが。へば仕方ね、皮を持って行くしか仕様ねなて、皮剥（は）いで、ぐるぐるぐるど丸めで、それとば担いで家さ戻って来たど。



そして、大（で）っただ戸板さ、バーンと張て、干して置いだど。次の日の朝間に起きで見だ
きや、皮、ぼっつど一所（ふとどこ）抜げてだど。『ありやりやりりや、これ困たもだな。矢張
（やば）り、病気あるはでだべな一。』ど思（も）て、次の日になたきや、又ぼっつど抜げた。又
抜げた。『そら見ろ。病（やまい）持ぢの熊捕て来て、したはで、ほんだだてば。こりやあ、屹度
（きっと）罰当だど。いい事無えど』村の人噂したど。

そして十日ばり過ぎだっきゃ、ケロケーっど毛コ一本も無ぐなった。

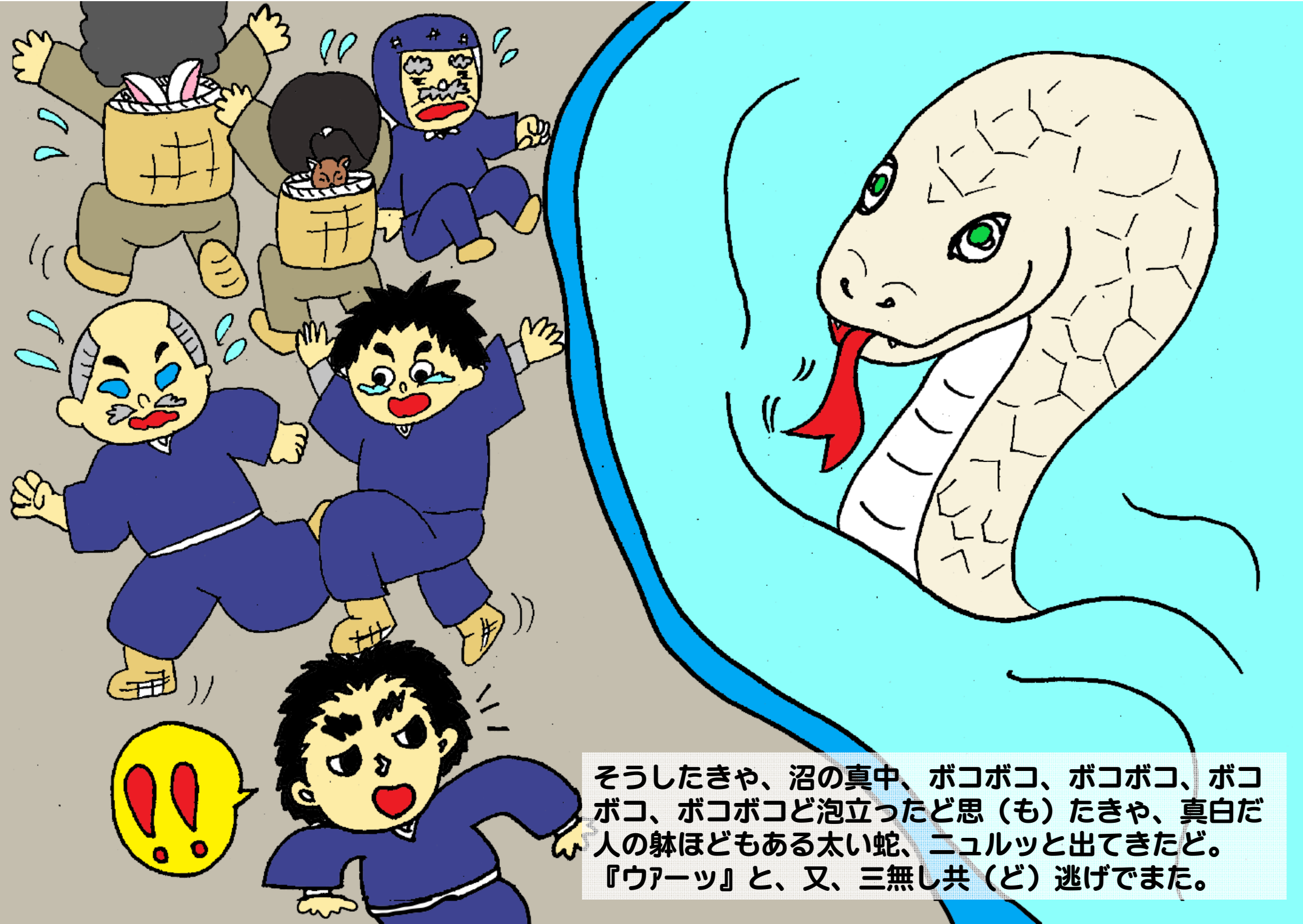


それから又、春ねなって、村の人達組んで、又 山さ獣獲さ行ったど。今度（こんだ）相馬から長慶の沢を越えて、秋田の田代の森まで行たど。いっぱい獣担（かづ）で戻て来た。

そうたきや、大（で）っただ沼あたど。いちばん年寄（い）ったマタギ、『ほらほら、みんな見ろ、見ろ、あの沼見ろ。あの沼せえ、千丈もあるて云（す）ほど深え沼だ。そして昔がら、あすこネ主居で、このあたりの、ろ、山とば守つるんだすね』おしえだんだど。



そしたきや十兵衛
『何ア、何ア、何ア、主居るって、我（わ）、生まれでがら、主ズ者ア見だ無え、どしたものだば、どのくれいのもだば』
『やめろ、やめろ』て云（す）、皆の声も聞がねで、今度（こんだ）、木の枝バツと折たきや、沼叩いで、『主一つ、出で来一い、出で来一い、汝（な）、何ぼの者（もん）だば。出でて来一い』て叫（さが）んだど。



そうしたきや、沼の真中、ボコボコ、ボコボコ、ボコボコ、ボコボコど泡立ったと思（も）たきや、真白だ人の躰ほどもある太い蛇、ニユルツと出てきたど。
『ウアーッ』と、又、三無し共（ど）逃げでまた。



そしたきや十兵衛、その主とばめがげで、ズダーン て鉄砲撃たど。主、天さでも逃(ね)げど思(も)ったんだがさ、ニヨロ、ニヨロ、ニヨロ、ニヨロど昇って行ったど思(も)ったきや、途中でドーツと沼に落ちで来たど。

そして、最後の力を振り絞る気なて、ヒューツと顔こ出したど。丁度(ちょうど)、西の尾太(おつぷ)山さお陽様が落ちで、空、真っ赤で、まわりの山も赤ぐ染まで、沼の水も主の血で染まで、主の目(まなぐ)も又真っ赤で、十兵衛とば睨めだど。それがら、誰も村の人達、十兵衛ど一緒に山さ行く人無ぐなった。『へん、さっぱどしたじゃ。年寄り共(ど)一緒に行けば、あへば駄目(まね)、こへば駄目(まね)て、それ獲れば駄目(まね)、これ獲(と)るなて、うるせして、わがらね。一人コの方(ほじ)、何ぼ一さぼかぼとすが、わがらねじゃ』
十兵衛は一人で獣獲に歩(あり)たど。

秋ネなって、その日も、朝早エぐ獣獲りに行ったんだばて、鳥一羽、兎一匹、見つかねであたど。『おかしなあ、今までこした事、1回も無(ね)してあたきやな。村で鉄砲撃ちの名人の我(わ)手ぶらで戻れば皆の嗤(わら)い者になるべな。こりや、暗くなるまで戻らいねえな』と思(も)て、ブサクサ、ブサクサ喋ってきたきや、目の前の木ど木の間をシュと横切ったものある。『それっ』走(はけ)で、うって見だきや猿であたど。

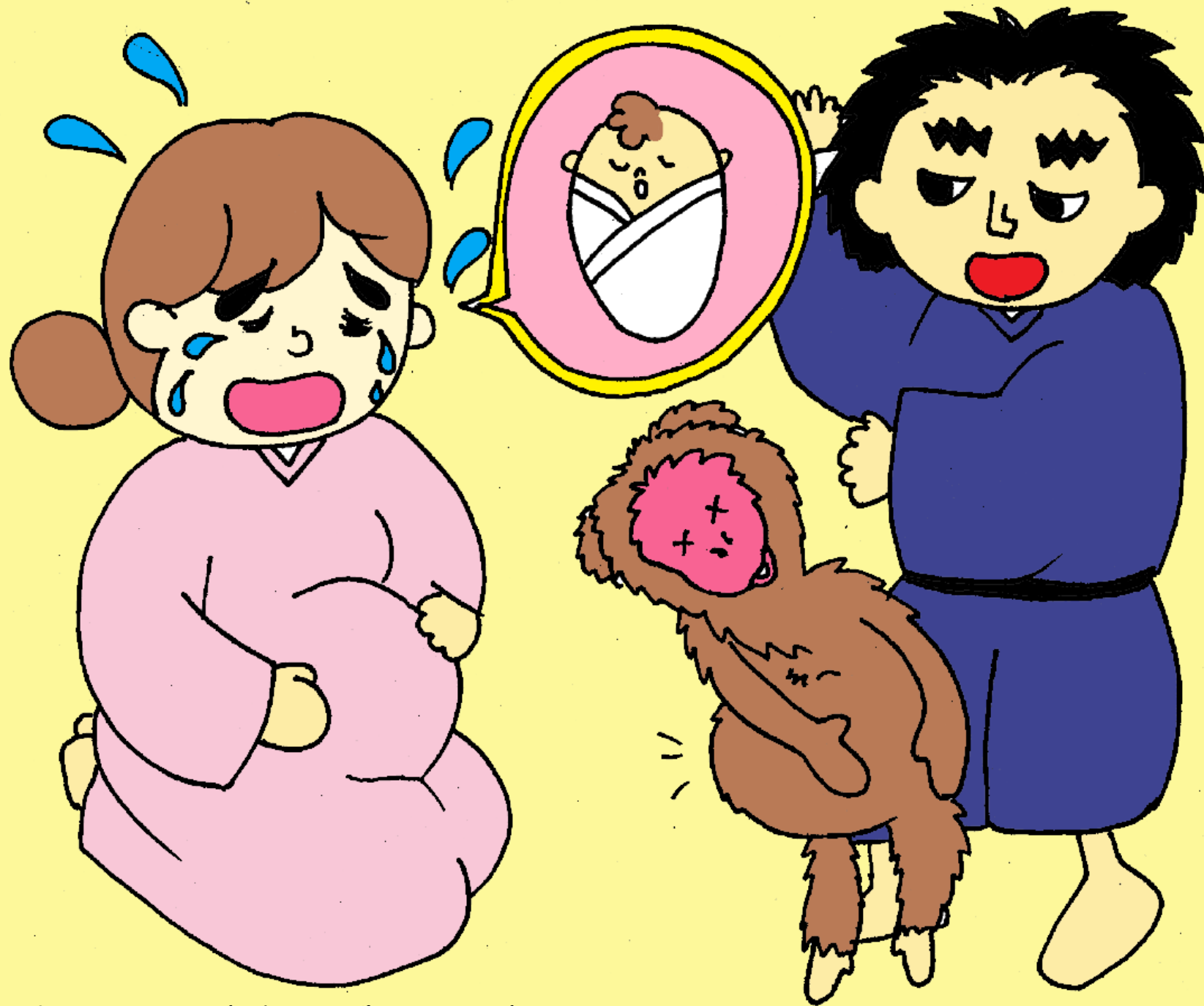


その猿、腹も何（な）も大（で）ったで、今にも赤子（おぼこ）落ちでくるほどの大きな腹の猿であたど。。



十兵衛鉄砲向けだど。そしたきや、猿、木の上で居て助けでけるて手合わだど。『この猿こりや、人の真似して、手合へで、汝（な）何だもだば』十兵衛、ズダーンて撃たど。

猿、クルッと一回転（まわり）したきや、下の石の上さどっと落ちで、死んだ。それとば、手ど足とば絡げで、鉄砲の後ろさぶら下げで、十兵衛、家さ戻たど。



嬢に『ろ、今日のみやげだエ』どっと投げでやた。

嬢、『わーいは、この猿、腹大きして、今、赤子生む猿だでば。私（おら）も来月ねなれば子ども産（わらしも）つ時に、こして、この腹大きい猿とば殺して・・・』て涙流したど。

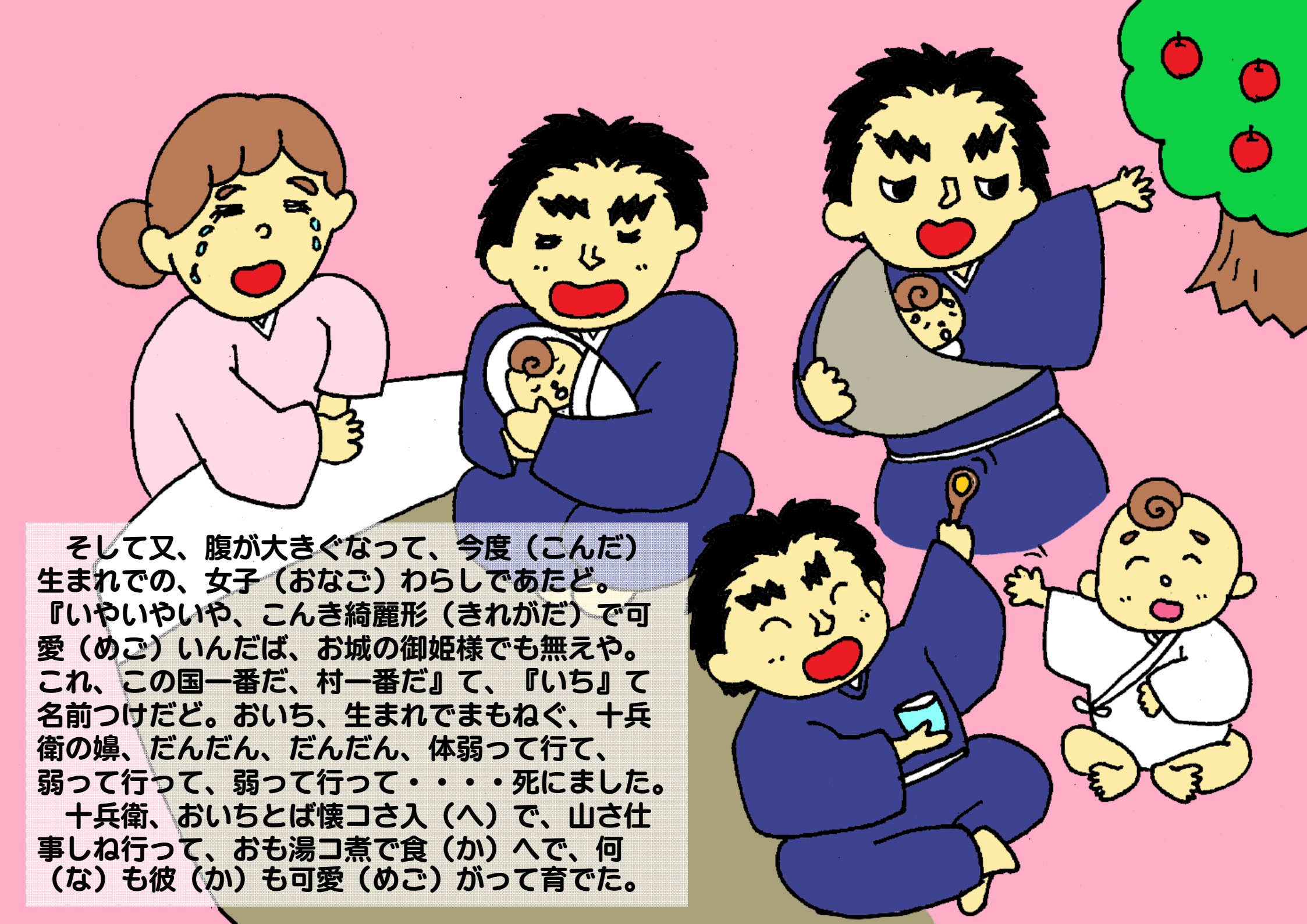
月代（かわ）て、その日、朝間から十兵衛生の嬢、腹痛んだ。病んで、病んで、病んで、病んで死ぬほど病んでもまだ出ねで、夜越して、次の日の朝間にやっと生まれまだど。

その生まれてきた赤子を見だきや、手伝（てづで）来た隣の婆、腰抜がした。手ど足ア熊ど同じであて、顔（つら）ど体ア猿どふとじ赤子であたど。何日もしないうちに亡くなりました。

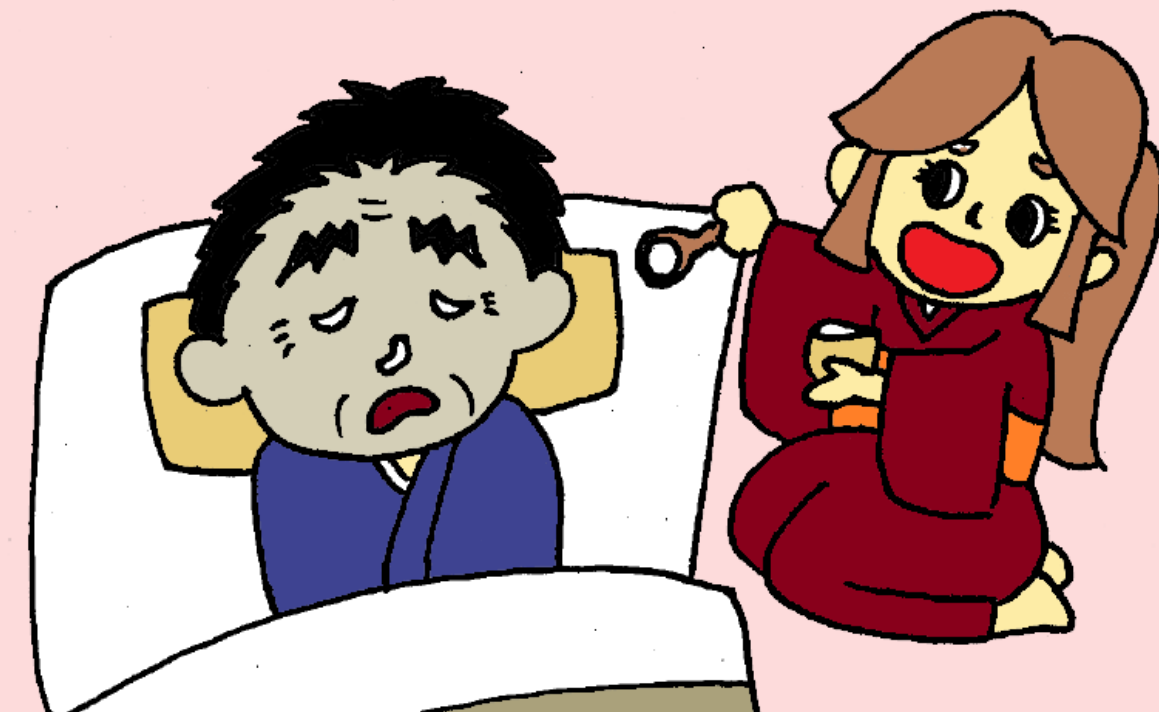


次の次の年に、又、十兵衛の嬢、が赤子産んだばて、又、そした男わらしであった。

『やっぱりなあ、昔から駄目（まね）てすもの殺したり、獲ったりすはで、祟りだありや、罰当たったんだ』て村の人みんなして噂して、誰も十兵衛の家さ行がねぐなてまだど。

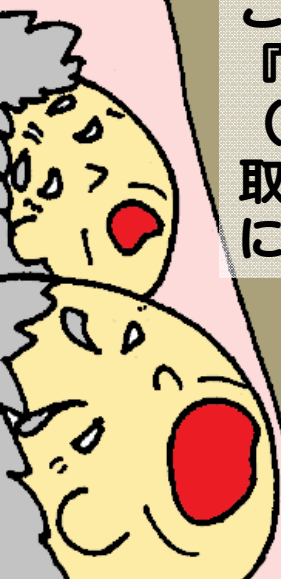
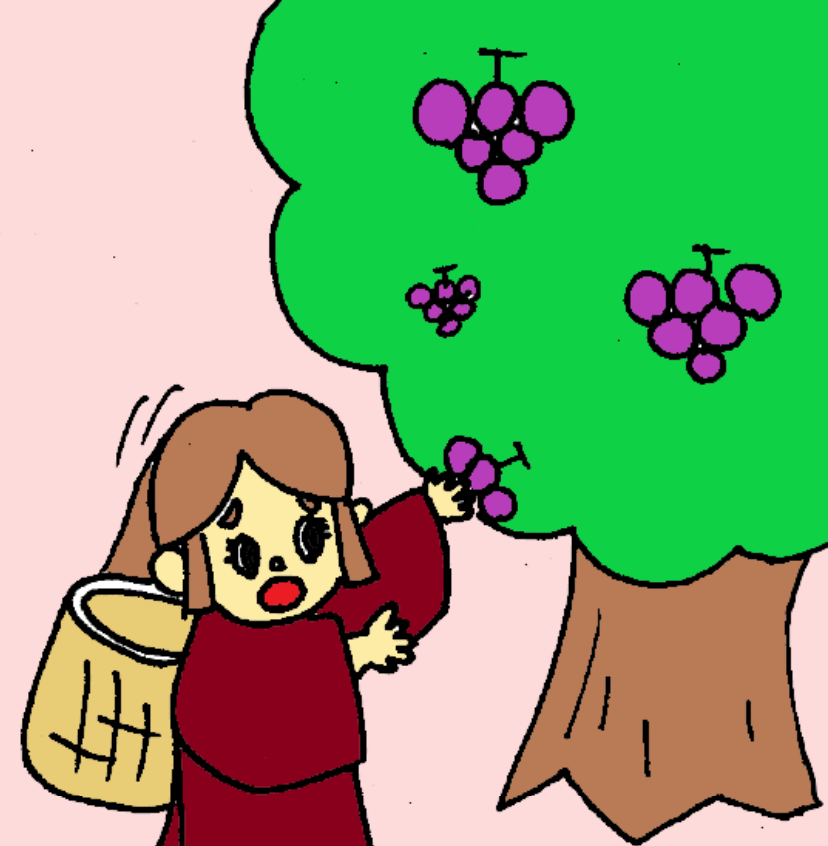


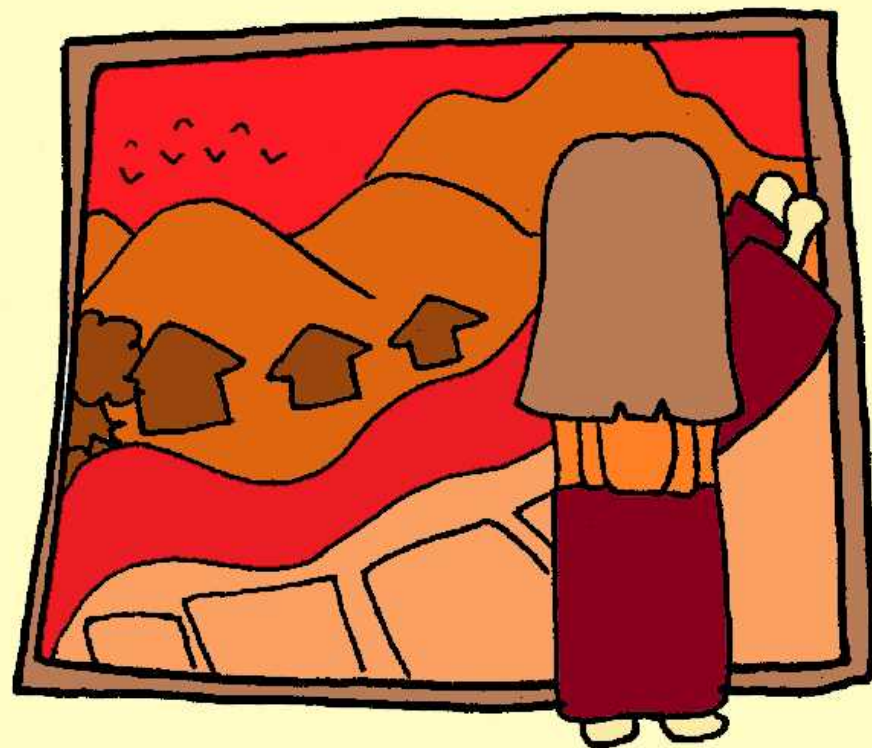
そして又、腹が大きくなって、今度（こんだ）
生まれでの、女子（おなご）わらしであたど。
『いやいやいや、こんき綺麗形（きれがだ）で可
愛（めご）いんだば、お城の御姫様でも無えや。
これ、この国一番だ、村一番だ』て、『いち』て
名前つけだど。おいち、生まれでまもねぐ、十兵
衛の嬢、だんだん、だんだん、体弱って行て、
弱って行て、弱って行て・・・死にました。
十兵衛、おいちとば懐コさ入（へ）で、山さ仕
事しね行て、おも湯コ煮で食（か）へで、何
（な）も彼（か）も可愛（めご）がって育でた。



そして、おいちが15歳を過ぎるねなたきや、
十兵衛、口だば喋（しゃべ）にいいばて、手
ど足、はまるで縄で絡（から）ががれだんに、
こうなつたまま、何も動げねぐなただ。

『そら崇りだ、そら罰だ』って、村の人達唾
（わら）た。おいちア、自分で山さ行って、木
取てきて、実を取てきて、庄屋様の手間取り
に歩いて、十兵衛とば養（やしな）たんだ。

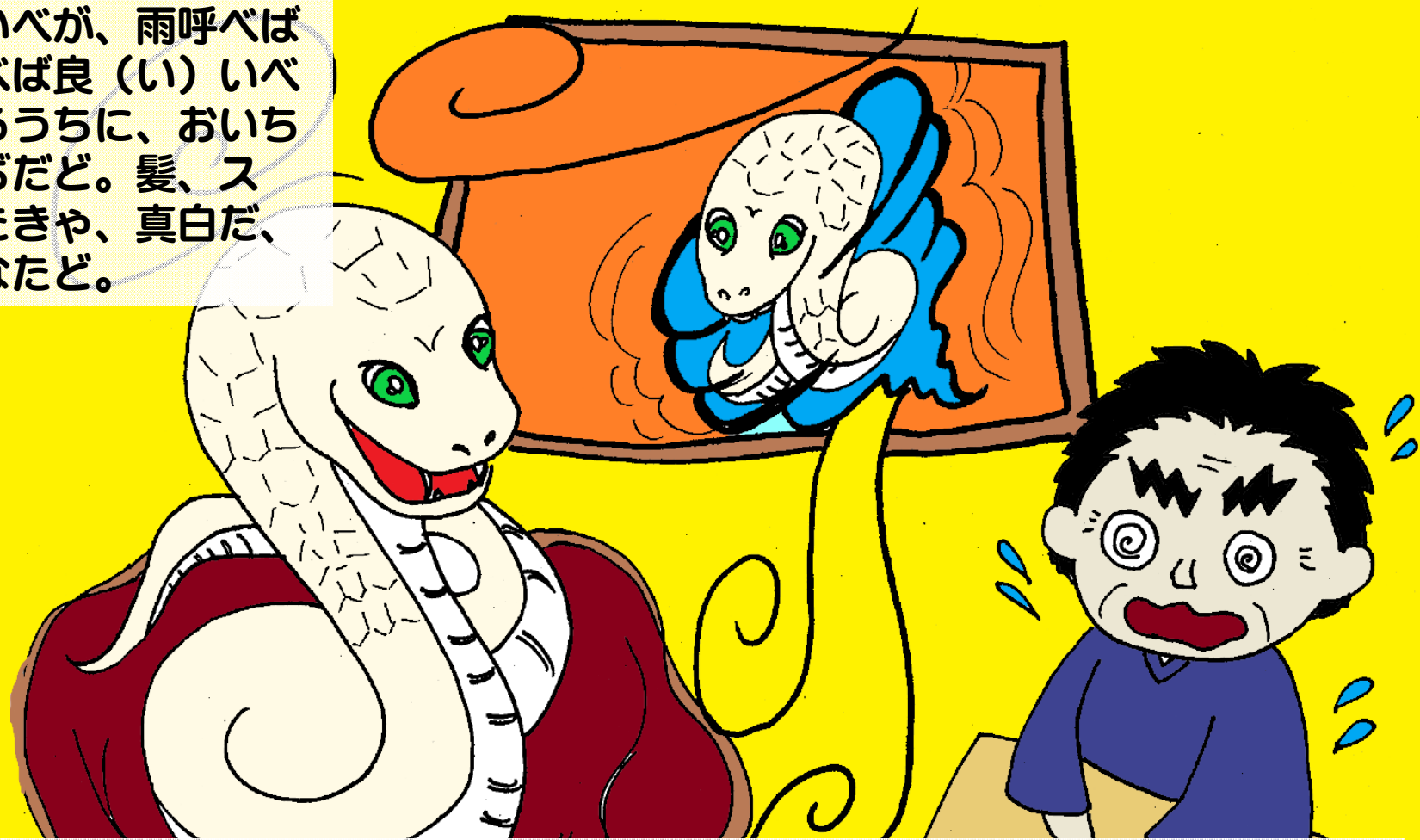




十六の秋になた時、十兵衛、『おいち、隣のろオ、ミサもトシも、皆 嫁コに行くずエ、お前（め）も、嫁コに呉（け）ねば駄目（まいね）んだばて、我（わ）、こした不様（ふじゃま）だどごで、どごさもやらいねなあ』て云（し）だど。そしたきや、おいち、家の、窓てす窓、戸てす戸。ガラーッと開げだど。そしたきや、ちょうど晩方で、西の空、真っ赤であた。山の紅葉（もみじ）も真っ赤であたど。そしたきや、それを見ながら、いちア、静（しずか）ーに歌こ歌ったんだど。



『風邪呼べば良（い）いべが、雨呼べば良（い）いべが、嵐呼べば良（い）いべが……』歌っているうちに、おいちの着物、スターツと落ちだど。髪、スポツと抜けだど。そしたきや、真白だ、大（で）ーっただ蛇になだど。



『お父（ど）、解（わが）たべ、私（わ）、誰（だえ）だがさ、判（わが）たべ。おら、お前（め）にかて殺さえた沼の主だ。お母（が）の腹借りで、生まれ変わって、お前（め）とば殺しに来たばて、あんまり可愛（めこ）がて、大事に育でで呉（け）るどごで、仇、討でね内に、山さ戻る時来てまた。いいが、おら居ねぐなても、お父（ど）一人（ふとり）で生きねば駄目（まいね）んだえ』喋たど思（も）たきや、家の中さ、ゴーツ、風入てきて、おいちの体とば、をぐるぐるぐるぐるると巻いだど思（も）たきや、又ゴーツて山の方さ流れで行て、おいち居ねぐなてまたど

十兵衛、どしたべの。

手足動がねで、隣近所も誰も来ねで、あど、死ぬず、待つばりだ。生きで居ながら地獄さ落ちだ。

丁度（ちよんど）、今、弘前の観桜会（かんごかい）だ。公園さ行てみれば、サーカスだの、やオートバイだの、お化け屋敷だのて、沢山（いっぺえ）小屋掛けで。あそこの前、通て見ろー。

四十過ぎた親父、木戸銭とる所（どご）の前（め）裾で、腹巻き出して、銅鑼声（どらごえ）張り上げて叫（さが）んでる。

『さあ、いらっしやい、いらっしやい。お代は見てから、お代は見てから。ご当地は初公開だよお客さん。見るは地獄、聞くは涙の物語り。信州は山の中。代々獣を獲って生業（なりわい）とする

猟師の家に、十月十日の日が満ちて、ある朝、おぎやあと生まれた女の子。山の怒りか、獣の祟りか、全身真っ黒の毛が生えていた。親の因果が子に報い、輪廻転生、世の倣い（なら）、花も恥じらう娘盛りを、流れ流れの旅の空。年は十八、名はお花。憐（あわ）れなるのは、この娘（こ）で御座い。お花さんよー、お花さんよー』

『あいよー、あいよー』幕の間から顔コペろっと出して、又引込（ふく）めだ。熊男だの、狼男だの、河童男だの、蛇女（おなご）だのて、様々な見世物来る。本当に、あした、化物だけんだ子供、生まれで、売られで来たんだびよん。

人の命も一つ（ふと）だばて、獣の命も又、一つ（ふと）だ。獣だはでて、やだら殺へば駄目（まね）んだど。



とっちぱれこ。